

二〇二五年度 大妻中野中学校 第三回アドバンスト入試

(二月二日午後 問題用紙)

国

語

座席番号			
			番

受験番号		
		番
		氏名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて全部で13ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認してください。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

□ 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答へなさい。(ただし、句読点や記号も一字に数えます。)

「恋人とのデートがきっかけで初めて美術館を訪れた全盲の白鳥建二さん。その日、作品を前に語られる言葉を聞きながら「全盲でもアートを見る」とはできるかもしない」と思うようになった。そして白鳥さんは美術館の開拓を続けていく中で、知人に勧められたのが水戸芸術館だった。」

一度目に白鳥さんが水戸芸術館に来たときには、蛍光灯を仕込んだライトボックストと写真を使った作品で知られるカナダのアーティスト、ジエフ・ウォール（一九四六年）の展覧会。その日、^{＊1}アテンダントを担当したのは、教育プログラム担当をしていた森山純子さんだつた。上司（その後、横浜美術館館長を経て現在国立新美術館館長の逢坂恵理子さん）から「全盲のひとが展示を見に来るので、展覧会と一緒にまわってほしい」と頼まれたといふ。

①全盲のひとが美術館に？ と森山さんは驚いた。もともと盲学校の近くで育つた森山さんは、白杖を使って街を歩くひとを多く見てきたが、全盲のひとが美術鑑賞するという姿はどうてい想像できなかつた。現れたのは、物静かな雰囲気の男性だつた。

森山さんは、どんな風に話をしたらよいかと迷いながら、逢坂さんと三人で作品を見てまわつた。特になんの問題もなく、楽しく鑑賞タイムは終わつたといふ。しかし、森山さんの中にはモヤモヤした感情が残つた。「あんな感じでよかつたのだろうか。本当はなにを話すべきだつたのだろう？ 色や形？ 作品の背景？ 印象？」そんなモヤモヤは、^{＊2}熾火のようにくすぐり続けた。【一】

「モヤモヤといつても、それは豊かな時間でした。何度も白鳥さんとの時間を思い返しては、美術鑑賞とはなにか 障害とはなにかなどを考える種となつてきました」

その一年後のことだ。森山さんはふと目にした展覧会のチラシに気になる情報を見つけた。「目の見えない人と観るためのワークショップ——ふたりでみてはじめてわかること」とある。それは、NPO、日本障害者芸術文化協会（現在のエイブル・アート・ジャパン）が企画した「このアートでげんきになるエイブル・アート'99」（東京都美術館）の関連プログラムだつた。

——もしかしたら、自分の中のモヤモヤを理解するヒントになるかもしれない。森山さんは参加を申し込んだ。

そのワークショップのナビゲーターとして参加していたのが、偶然にも白鳥さんだつた。白鳥さんは、すぐに森山さんのことと声で認識し「あー、森山さんじやないですか！」と声をかけた。思いがけない再会にふたりは喜んだ。

会期中に3回開かれたワークショップは反響^{はんきょう}を呼び「視覚に障害がある人の美術鑑賞、すなわち、さわって鑑賞する」という既成概念を大きく変えるきっかけとなつた。また、さわることのできない平面作品を言葉で鑑賞することに大いなる可能性があることを多くの人が発見し実感した。

見える人たちも、一人で見る時とは異なった感覚で作品に向き合う」となり、作品からさまざまことを発見して感動することが多く、何度も「^②□からウロコが落ちる」経験をした。

『百聞は一見をしのぐ!? 視覚に障害のある人との言葉による美術鑑賞ハンドブック』

この鑑賞ワークショップは、白鳥さんの個人的な活動にすぎなかつた「^③見えるひとと見えないひとの鑑賞」が、確かな輪郭を持つて社会に出でいつた記念すべき日となつた。この少し前に日本障害者芸術文化協会の関係者と知り合つて白鳥さんは、このワークショップのナビゲーターになることを承諾した。最初はあまり気がすすまなかつたが、とにかく勇気を出して人前に立ち、初めて自身の体験や思いを言葉にした。「人前で話すのは苦手だつたから気がすすまなかつたんだけど、周囲の勧めもあり自分の体験を話しました。でも、その日の様子に関してはあまり覚えてない。俺もかなり緊張していて！」【II】

「このときには、美術鑑賞を仕事やライフケースにするつもりはあつたの？」とわたしは訊ねた。

「いや、全然。ただ、自分が個人としてなにが楽しめてなにが楽しめないのか、そういうところから知りたかっただけで」【III】

ワークショップには、参加者とナビゲーターが鑑賞体験について振り返る時間があり、その中で「色について話してもいいのか？」など参加者からたくさんの質問が出た。そのやりとりを聞きながら、森山さんはこの見えないひととの鑑賞は、美術鑑賞とはなにか、そして障害や他者とのコミュニケーションについて考える貴重な体験になる、という確信を持つた。そこで、ワークショップが終わると、「うちのボランティアスタッフの研修に来てもらえませんか」と白鳥さんに声をかけた。

特筆すべきは、その目的である。

「それは、見えるひとと見えないひとの差異を縮めることではありませんでした。むしろ視覚障害の方々と一緒に見ることで、美術館や学芸員、そして鑑賞者のわたしたちのほうも得るものがあると感じました。作品の見方というものはとてもペーソナルなもので、見えているひと同士でも必ずしも一致しないものです。障害の有無は関係なく、その認識のズレを対話することで埋めることができるのはと思いました」【IV】

森山さんが、迷いなく前例のない行動に出られたことには、ひとつ背景がある。それ以前から水戸芸術館では、来館者に向けて対話型鑑賞ツアーワークを行つていて、その担当手となる市民ボランティアの育成に力を入れていた。前述の森山さんの上司、逢坂恵理子さんは、ニューヨーク近代美術館(MoMA)が提唱する対話型鑑賞の*³メソッドを日本に紹介したひとりで、MoMAの教育部のスタッフを水戸に招き、全国の学芸員に向けた研修を実施したことがあつた。当然のことながら、森山さんもその研修を受けていた。

驚いたのは、白鳥さんが自然に行つていた鑑賞方法がそのMoMAのメソッドと*⁴酷似していたことでした。作品の簡単な描写の積み重ねから鑑賞に入つていくこと。参加者による解釈や意見をひとつにまとめることはせず、答えが出ないもの、矛盾があるものについても、その場でシェアしつつも、無理に答えをひとつに統一しないという自由な鑑賞スタイルのことです」

」のようにして水戸芸術館と白鳥さんはドラマチックな再会を遂げた。白鳥さんはそれから年に一、二度のペースで、ボランティアや博物館実習生の研修を担当するようになった。(中略)

「」で話をもう一度一九九五年に戻そう。

好きなひととデートがしたいと初めて美術館に足を運んだ白鳥さん。その楽しい時間がきっかけとなり、美術館へのアプローチが始まった。「自分は全盲だけど作品を見たい。誰かにアテンドしてもらい、作品の印象などを言葉で教えてほしい、たとえ短い時間でもいいのでお願ひします」と粘り強く美術館に電話をかけ続けた――。

白鳥さんは別にライフワークにしようなどと思つていたわけではないらしいが、結果的には美術を見る行為を通じて、④それまで「見えるひと」に対して感じていた引け目や「見える」と「見えない」の間の壁が取り払われていったという。

そのきっかけになつたのは、ふたつのできだとだ。ひとつ目は、最初にひとりで訪れた名古屋市美術館で一九九六年に行われたゴッホの展覧会。「素描が多かつた」と白鳥さんは記憶する。

その日は、とても長い日だつたらしい。

今まで「」と白島さんは「自分たちが好きなものを選んで見ていい」「疲れたらやめよう」というスタンスだが、当時はまだまつたくの手探り状態だった。それは、アテンドしてくれた美術館のひとも同じで、その日ふたりはなんと一点ずつ時間をかけてじっくりと全作品を鑑賞した。おかげで全七三点を見終わるまでに三時間以上もかかった。

「俺はもうヘトヘトで、そのひともずっとしやべつていたから、相当疲れたろうなと思って、お礼を言おうと思つたら、向こうから先に『ありがとうございます』といました』つて言われちゃつて。⑤あれ、どういうことだ!? つて。どうやら展覧会の企画側にいても、作品をそこまでじっくり見る機会つてなかつたみたいで、むしろありがとう』としましたつて言われて、驚いた」

助けてくれているようで、実はそのひとも一緒に見ることを楽しんでいた。いつもいつも「ありがとうございます」と言う側だった白鳥さんが、「ありがとう」を言われる側に逆転した瞬間だった。

ふたつ目は、「目が見えるひとも、実はちゃんと見えてないのではないか」と感じさせる面白いでき」とだ。それは印象派の作品展で、アテンドしていたのは松坂屋美術館(名古屋市)の男性スタッフ。何枚かの絵を見たあとに男性は、一枚の作品を前にして、「湖があります」と説明を始めた。その後に「あれっ!」と声をあげ、「すみません、黄色い点々があるので、これは湖ではなくきつと原っぱですね」と訂正した。男性は「自分は何度もその作品を見ていたはずなのに、ずっと湖だと思い込んでいた」と驚いている。

それを聞いた白鳥さんも*5 仰天した。

「ええ!? 湖と原っぱって全然違うものじやないのつて。それまで『見えるひと』はなんでもすべてがちゃんと見えているつて思っていたんだけど、『見えるひと』も実はそんなにちゃんと見えてはいないんだ!」と気がついて。そうしたら、色々なことがとても気楽になつた」

そう、「見えるひと」が、「見えないひと」と一緒に作品鑑賞をすると、^⑥自分の思い込みや勘違いにたびたび気づかされる。普段、目が見える人々は、膨大な視覚情報にさらされながら生活しているのだが、細かい情報をすべて脳内処理することは不可能なので、目は必要な場所に注目し、必要な情報だけを取捨選択する。同時に必要のないものは視覚に入つても脳内で処理されない。セレクティブ・アテンションと呼ばれる認知の*6 バイアスの一種だ。

この種の認知バイアスを証明したとても有名な「ゴリラ」の実験がある。実験のために用意された動画の中では、黒いシャツと白いシャツを着たグループが狭い場所で動きながらそれぞれバスケットボールをバスし合っている。実験の参加者は、白いシャツを着たグループが何回バスしたかを数えるように求められる。動画の途中では、バスをする人々の間を着ぐるみのゴリラがゆっくりと横切っていく。そしてビデオを見終わつたときには「ゴリラはいましたか」と聞かれると、だいたい半数から三分の二のひとがゴリラには気づかなかつたと答える。参加者は「見るべきもの」に集中した結果、ほかのものが見えなくなつていた。しかし、バスの回数を数えることを指示されない場合は、たいていのひとがゴリラに気がつく」とができた。

同様のことを哲学者の鷺田清一^{きよかず}は著書の中でこう書いている。

わたしたちの通常の「見る」は、だから、とても貧しい。見るべく整えられたもの、つまりは見るべきものを見るだけで、あらかた過ぎてゆく。(中略) 眼は意味あるいは記号に感応しているのであって、そこから^⑦「見る」との野生^{だつらく}は脱落^{だつらく}している。射るどころか、さまよう[」]と、*7 たゆたう」と、まじろむことすら忘れた眼……。

見えるものにある照準を定めるためには、そして見えるものに「世界」という秩序をあたえるためには、おそらくそうした*8 エコノミーがどうしても必要なのだろう。(『想像のレッスン』)

だから美術館に足を運び、長い列に並び、入場料を払い、やつとのことで見た作品でも実は見えていないもののほうが圧倒的に多い。しかし、「見えないひと」が隣にいるとき、普段使つている脳の取捨選択センサーがオフになり、わたしたちの視点は文字通り、作品の上を自由にさまよい、細やかな*9 ディテールに目が留まる。おかげで「今まで見えなかつたものが急に見えた」というこの松坂屋美術館の男性のような体験が起つ。白鳥さんにとって「のでき」とは、「見る」という概念を揺るがす画期的な体験となつた。

「それまでは、たとえ目が見えていても、ちゃんと見る気にならないと見えないらしいというのは知識としては知っていたわけ。それは物の見方とか注意力の話かなって思うんだけど、実感として自分の中にはなかつた。だから、見えるひとは見たらなんでもわかるだろうと思つてた。だからこのとき、なんだ、見えるひとも実はちゃんと見えてないんだとわかると、いろんなことが気楽になつたよね」

「この話を聞いたとき、なるほど、なんて面白いんだろう！」と⑥□を打つた。同時に、「こんな風に白鳥さんを開眼させた作品、「湖に見える原っぱ」とは、いつたいどんな作品なのだろうと気になつてしまふがくなつた。二〇年以上前の話なので、確認するのは容易ではなさそつだが、まずはできるところから調べてみるとした。

白鳥さんの記憶^{きおく}を改めてたどると、場所は間違いなく松坂屋美術館で、時期としては美術館めぐりを始めてすぐのところだという。ということは、九六年か九七年だろう。

シンプルにググつてみたところ、「印象派・後期印象派展」という展覧会が一九九六年二～三月に松坂屋美術館に巡回^{じゅんかい}したことがわかつた。今度は松坂屋美術館に絞つて展覧会記録^{けんしょく}を調べてみると、その前後にほかの印象派関連の展覧会は行われていない。よし、bingo！

次に図録を手に入れるべく検索を続けた。再びシンプルにググつてみたところ、ヤフオクで図録が売られていた。便利な世の中だなあ！ と思いつながら、一〇〇円で落札。

届くなり、ページをめくつた。原っぱに見える湖ねえ。そんなものは、そろそろ転がつていてるわけがないから、見ればすぐにわかるはずだ。

ページをめくると、すぐにこれという一枚があつた。フィンセント・ファン・ゴッホの《アルルの公園、陽のあたる芝生》（一八八八年）。よし、ちゃんと黄色い点々もある。

念のためほかのページも見ていくと、あれ、ううむ、と戸惑つた。A原っぱのような湖のようないう絵が実はいくつもあるではないか。アルフレッド・シスレーの《オルヴァンヌ河岸の柳》（一八八三年）にカミーユ・ピサロの《ルーヴシエンヌ》（一八七〇年）も怪しい。

すっかり混乱したわたしは、後日、白鳥さんと¹⁰マイティと一緒に図録を見返した。すると、マイティはわたしがピックアップした作品を見ながら、「えー、これ？ 全然、湖に見えないよー」と図録を取り上げ、別のページを開きながら、「ねえ、これじゃない？ ほら、湖に見えない？」と言つた。それは、完全にノーマークの作品だった。

なんだ、なんだ？ どういうことなんだ？

Bなぜここまで混乱するのか。その原因を紐解く鍵は、「印象派」にある。

印象派の絵はくつきとした線では描かれておらず、点の集まりや荒々しい筆跡がそのまま残されている。物体としての写実性よりもその瞬間の「光」と「印象」を優先した結果だ。

図録を前にしたわたしとマイティは「ほかになにか絵のこと覚えてることないの? ひとがいたとか、天気がこうだつたとか」と白鳥さんに聞いた。

「うくん、ずいぶん前だからねえ。覚えていないけど、絵の中に人間はいなかつた気がする」

「黄色い点々は確かなの?」

「うーん、そうだとと思うんだけど……」

それが唯一の手がかりだった。

最終的に候補として絞り込まれたのは、フインセント・ファン・ゴッホの『アルルの公園、陽のあたる芝生』、ブランシュ・オシユデ（一八六五～一九四七）の『烟』（一八九〇年頃）、そしてクロード・モネの『洪水』（一八八一年）の三作である。

『洪水』はマイティのチョイスだが、わたしはこれではないと確信していた。なにしろ『洪水』は増水したセーヌ川を描いたもので「水」そのものだし、原っぱと呼ぶには全体的に印象が暗すぎる。

わたしたち三人は、図録を前に、ああだこうだと議論した。しかし、すべては憶測にすぎず、決着がつくはずもない。なにしろ唯一答えを知っている白鳥さんは「そう、これだつたよ!」と断言することはできない。そして、松坂屋美術館の男性が誰だつたかはわからない。

このやりとりの直後、わたしは奈良県立図書情報館で講演をすることになっていた。テーマはまさに白鳥さんとの美術鑑賞体験である。よし、こうなつたら大勢のひとの力、「集合知」を利用して決着をつけようと思いついた。その日、会場のプロジェクターに三枚の写真を順番に映し、約四〇人の来場者に「どれが原っぱに見える湖だと思いますか」と質問し、挙手してもらつた。

答えは、見事にバラけた。意外なことに「洪水」を選んだひとも多かった。
マイティは嬉しそうに言う。

「実は誰も答えがわからないっていうのが、この話のいいところだよね」

⑨うん、そうなのかもしれない。

（川内有緒『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』集英社インターナショナルより）

[注] * 1 アテンド：付き添つて世話をすること。

* 2 煙火：まきなどが燃えて炭火のようになつたもの。

* 3 メソッド：方法。方式。

* 4 酷似：非常によく似ていること。

* 5 仰天：予想していなかつたことが起きて、非常に驚くこと。

* 6 バイアス：先入観。偏見。

* 7 たゆたう…やらやらと揺れ動いて定まらない」と。

* 8 エコノミー：経済。

* 9 ディテール：全体の中の細かい部分。細部。

* 10マイティ：筆者に白鳥さんを紹介した友人。

問一 —— 部①「全盲のひとが美術館に？」と森山さんは驚いた」とありますが、なぜ驚いたのですか。その理由として最も適切な部分を「～から。」

に続くように本文中から三十字以内で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問二 本文から次の一文が脱落しているが、どこに補うのが最も適切か。本文中の【一】～【四】の中から一つ選びなさい。

それは、助ける、助けられるという関係が反転するような新たな発想だった。

問三 —— 部②  からウロコが落ちる」、⑧  を打った」の  に入る言葉として最も適切なものを、次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア・目 イ・鼻 ウ・舌 エ・腹 オ・膝 ^{ひざ} カ・足

問四 —— 部③「見えるひとと見えないひとの鑑賞」とありますが、3ページの終わりまで読み、その方法としてふさわしいものを次のア～エの中

から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア・鑑賞体験について振り返る時間をメインとする方法。
- イ・目の見えるひとと見えないひとの差異を縮める方法。
- ウ・作品の簡単な描写の積み重ねから鑑賞に入っていく方法。
- エ・解釈や意見について無理に答えをひとつに統一しない方法。

問五　——部④「それまで『見えるひと』に対して感じていた引け目や『見える』と『見えない』の間の壁が取り払われていった」とありますが、その理由として次の文が正しくなるように□(1)、(2)の中に入る語句を本文中から探し、それぞれ十七字で抜き出しなさい。

「見えるひと」は□(1)十七字□と思つていたが、実は□(2)十七字□とわかつたから。

問六　——部⑤「あれ、どういうことだ!」とあります。その理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 今までこそ白鳥さんが疲れたら作品の鑑賞をやめるスタンスだが、この日は美術館の人と最後まで全作品を鑑賞したので疲れてしまつたから。
イ. 三時間以上かけて説明してくれた美術館の人は相当疲れていたが、白鳥さんにその疲れを気づかれないよううまく隠そうとしていたから。
ウ. 白鳥さんのほうから先に美術館の人に一緒にまわつてくれたお礼を言おうとしたが、逆に美術館の人のほうから先にお礼を言われたから。
エ. 美術館の人は展覧会の企画側にいる立場だが、実は作品についての専門知識が乏しいことを白鳥さんに見透かされてしまいそうになつたから。

問七　——部⑥「自分の思い込み」について、あとの各問いに答えなさい。

- (1) 日常生活の中で、自分自身で気づいていない無意識の思い込みが生じていることがあります。その一例として、性別による無意識の思い込みが挙げられます。その具体例をあなた自身の体験や身近なことにもとづいて答えなさい。

*文の書き出しは「女の子だから」または「女性だから」で書き、文末は「……という思い込み。」に続くように書くこと。

- (2) (1)で答えた思い込みを解消するために、どのようなことが大切だと思いますか。あなたの考えを答えなさい。

問八　——部⑦「見る」との野生」とありますが、このことを美術鑑賞にあてはめた場合、作品をどのように見ることですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 作品をセレクティブ・アテンションで見ること。
イ. 作品についてある標準を定めてから見ること。
ウ. 作品について脳の取捨選択センサーで見ること。
エ. 作品を自由な視点で細やかな部分まで見る」と。

問九 ～部 A 「原っぱのような……ではないか」・B 「なぜ」今まで混乱するのか」の働きとして最も適切なものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア. 自己の意見に対し、読者に明確な同意を得ようとしている。
- イ. 問いかけることで驚きの気持ちを伝えようとしている。
- ウ. 疑問の形を取りながら、反対の内容を強く主張している。
- エ. 問題を投げかけて注意を引き、後から答えを提示している。

問十 ——部⑨「うん、そうなのかもしない。」とありますが、筆者がそのように考えた理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ

選び、記号で答えなさい。

- ア. 美術作品の見方は、人によって違うということを改めて感じさせてくれる話だから。
- イ. 美術作品の見方は、専門知識のあるなしに関係ないということを改めて感じさせてくれる話だから。
- ウ. 印象派の作品の見方は、人によって違うということを改めて感じさせてくれる話だから。
- エ. 印象派の作品の見方は、専門知識のあるなしに関係ないということを改めて感じさせてくれる話だから。

二 次の各問い合わせなさい。

A 漢字に関する問題

問一 次の一一部①～⑩のカタカナは漢字に直し、漢字はその読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 両国のワカイに向けて努力する。
- ② 二十年ぶりに新記録をジユリツした。
- ③ 試合の終盤でケイセイは逆転した。
しゅうばん
- ④ 多くの本を読んでキヨウヨウを身につける。
- ⑤ 煙をタガヤして野菜を作る。

⑥ 久々に家の近くの銭湯に行く。

⑦ 母は私のために時間を割いてくれた。

⑧ 選手交代の潮時を見極める。

⑨ 旅行費を工面するために節約する。

⑩ 真っ赤に熟れたトマトを収穫する。

B ことわざ・慣用句に関する問題

問一 次の各問いに答えなさい。

(1) 次の空欄ア～エにはいざれも漢数字が入るが、その中で最も少ない数はどれか。ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. □里の道も一步から 【どんな大きなことも最初は小さなことから始まるものだということ。】

イ. 人のうわさも□日 【世間のうわさは長くは続かず、やがて忘れられるということ。】

ウ. □聞は一見にしかず 【人から何度も聞くより、実際に一度目にする方がわかりやすいということ。】

エ. 悪事□里を走る 【悪い行動はすぐに世間に知れ渡るということ。】

(2) 次の空欄ア～エに言葉を入れた時、生き物ではない言葉が入るものはどうか。ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 取らぬ□の皮算用 【まだ手に入れてないものをあてにして、計画を立てること。】

イ. 井の中の□大海を知らず 【限られた世界で生きているものは、他に広い世界があることを知らないということ。】

ウ. □心あれば水心あり 【相手が好意を示せば、自分も相手に好意を示そうと思うこと。】

エ. 白羽の□が立つ 【多くの中から選ばれたり、抜てきされたりすること。】

(3) 次の空欄ア～エに漢字を一字入れた時、その中で最も画数が少ない漢字はどれか。ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 後足で□をかける 【お世話になつた人を裏切り、去り際にさらに迷惑をかけること。】

イ. □に短したすきに長し 【中途半端で結局、何の役にも立たないこと。】

ウ. 雨だけは□をうがつ 【小さなことでも根気よく続けていれば、やがて大きな成果を得られるということ。】

エ. 火に□を注ぐ 【盛んな勢いのものに、さらに勢いが増すようのこと。】

C 文法・言葉づかいに関する問題

問三 次の(1)・(2)の各グループの中には、——部の性質が他とは違つているものが一つあります。それぞれ他とは違つているものはどれかを考え、ア～エの記号で答えなさい。

(1) ア. 幼い頃は泣いてばかりいた。

イ. 遊んでばかりいてはいけない。

ウ. 一週間ばかり旅行に出かけた。

エ. この本には難しい漢字ばかり並んでいる。

(2) ア. 明日までに宿題を終わらせるつもりだ。

イ. となりの町まで散歩に出かける。

ウ. 彼女の髪は肩まで届いている。

エ. 大阪までは新幹線を利用する。

問四 二〇二五年の年末、大妻美代さんは、お世話になつた中野先生に年賀状を送ろうと考えました。以下の会話文を読み、あとの各問い合わせに答えなさい。

美代 「中野先生に年賀状を送ろうと思うんだけど、『ハッピーニューイヤー！』とかは良くないよね？」

父 「そうだよ。友達に送るならそれでもいいけれど、きちんと漢字の賀詞がしを使った方がいいね。賀詞つていうのは、新年のあいさつの言葉のことだよ。」

美代 「年賀状に大きく『迎春』とか『寿』って書いてある。これが賀詞ね。私もこれを使うわ。」

父 「ちょっと待つて。目上の人や年上的人に送る時には、横書きだつたり一文字や二文字の賀詞を使うのは良くないんだ。こういう時は縦書きで四字以上の賀詞を用いるのが一般的だよ。」

美代 「そうなんだ。相談してよかつたわ。賀詞はわかつたけど、年賀状つてどういうことを書いたらいいのかな。中野先生も私も寒いのが苦手だから、一緒に乗り切りたいと思つてているんだけど……」

父 「先生を気遣うのは、いいアイディアだね。でも年賀状では『辛い』『終わる』『苦しい』『去る』などの縁起の良くない表現は使ってはいけ

ないから注意してね。」

美代 「敬語にも注意が必要よね。私この前、間違つて自分の感謝を伝える場面で、『感謝なさつております』って言つてしまつて恥をかいたわ。

年賀状では誤つた敬語を使わないようにしないと。」

父 「良い点に気がついたね。自分の行動を敬語にする時には尊敬語ではなく、謙譲語を使わないとね。お世話になつた先生への年賀状だから、先生が良い年を迎えたことを喜ぶ気持ちや健康を祈る気持ちを表す時には、謙譲語で表現すべきだね。」

美代 「二〇二六年の干支は何だつたかしら？」

父 「丑の十二時のこと漢字二字で言い換えると、来年の干支が使われているよ。昔は数字ではなく、十二支を使って時間を表していく、現代でもその影響が残つてているのがわかるよね。」

(1) 中野先生に送る年賀状の賀詞として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 初春

イ. 賀春

ウ. 謹賀新年

エ. 去年は大変お世話になりました

(2) 中野先生に送る年賀状の本文について、あととの各問い合わせに答えなさい。

Ⓐ 最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 裕中^{もちゅう}につき年頭のごあいさつは遠慮いたします

イ. 輝かしい新年を御迎えのことと御喜び申し上げます

ウ. 本年も辛い寒さが続きますがお互い乗り切りましょう

エ. いつも相談に乗つてくれて感謝なさつております

Ⓑ Ⓐで答えた文章の後に、中野先生の健康を祈る気持ちとしてふさわしい一文を考えて答えなさい。ただし適切な敬語を必ず用いること。

(3) 二〇二六年にあてはまる干支として最も適切なものを次の語群の中から一つ選び、漢字で答えなさい。

〔語群〕 子^ね・寅^{とら}・辰^{たつ}・午^{うま}・未^{ひつじ}

